

[国 語]

書く内容を視覚化した継続的短作文指導

- 合言葉や三色作文を取り入れて -

細野真由美*

1 主題設定の理由

1年生は、入学してすぐにひらがなの学習が始まる。児童は、身の回りの物や友達の名前を自由帳に書き綴ったり、手紙を書いたりするなど、覚えたてのひらがなを使って書きたいという意欲が高い。しかし、生活科の活動をした後、作文シートを書く場面になると、「何を書いていいかわからない」「書くことが決められない」と戸惑ったり、困ったりする様相が見られる。そして、「こうえんにいきました。ぶらんこにのりました。すべりだいをしました。」というような自分がしたことを羅列した内容の作文が多く見られる。1年生でも、活動の際にいろいろなことを感じ、考えている。その時の様子や自分の抱いた気持ちなどを相手に分かりやすく伝えるために、どのように遊んだのかなど具体的な様子等を加えて書く力を身に付けさせたい。

桂聖(2009)は、「国語がわかりにくい一番の原因は、頭だけで想像したり意味を考えたりする活動が多いことです。念頭操作だけに頼らないようにするには、目で見えるわかる、つまり『視覚的な理解を優先して授業を改善する』ことが大切です。(略筆者)ですから、国語授業のユニバーサルデザインでは、念頭操作による言葉のやり取りではなく、視覚的な理解を優先して見えない「論理」を「見えるか」することが大切です。」¹と述べ視覚化を授業改善の要件に挙げている。この視覚化を1年生入門期の「書くこと」の授業に導入し、合言葉や色別による配置で構成を考えることで、思いや考えを自分の言葉で順序に沿って書く姿を具現できると考える。

また、野口芳宏(2005)は、「歩くように、呼吸をするように、負担なく、構えることなく、文章が書けるためにはどうすればよいのか。そのことに応えて私は、子どもたちに次のように言う。とにかく文章をいっぱい書くことが大切。(略筆者)文章を書く力は、要するにいっぱい書かせることによって伸びるのである」²と、書く力の前提として、書く習慣の形成を重視している。当校の低学年は、連絡帳に毎日、出来事作文を書く活動を行っている。出来事作文とは、家の人(主に保護者)にその日の出来事の中で一番知らせたいことを連絡事項の後に記述するものである。そこで、連絡帳に毎日書くという日常的な活動と関連させた短作文の学習を、帯単元として国語科年間指導計画に位置付けることで、段階的で継続的な指導ができ、そのことにより、児童の書くことへの抵抗感を少なくすることができる。さらに、出来事作文を「①視写する、②一文書く、③三文書く」のように段階を追って継続的に指導することで、着実に書く力を身に付けていくことができると考える。

そこで本研究では、ひらがなを覚えたての書くことに意欲が高い時期を捉えて、視覚化した短作文の活動を日常的・段階的に積み重ねる実践を試みることで、入門期の児童の書く力を高める指導の在り方を考究する。

2 研究の目的

入門期の児童の書く力を高めるため、合言葉や色別に視覚化された書き方を示した継続的な指導の有効性を明らかにする。

3 授業の実際と考察

(1) ひらがな習得後の「一文作文」から「三文作文」を書く力を付ける指導

ひらがな学習が終了した時期に、まず教師の提示した文を視写することから始めた。徐々に自分で題材を選んで段階

* 上越市立南川小学校

的に書かせた。[資料1]

[資料1 一文視写から題材自由出来事作文までの過程] (5月下旬)

- 1日目 「きょうだいがくからきょういくじっしゅうのせんせいがありました。」(視写)
- 2日目 「こくごではなのみちをよみました。」(視写)
- 3日目 「たいいくでてつぼうをしました。」(視写)
- 4日目 「ひるやすみに○○ちゃんとあそびました。」(○○に遊んだ友達の名前を入れて書く。)
- 5日目 「ひるやすみに○○をしました。」(○○にしたことを入れて書く。)
- 6日目 「20ぶんやすみに○○をしました。」(○○にしたことを入れて書く。)
- 7日目 20分休みか昼休みのどちらかを選んでしたことを書く。
- 8日目以降 自由に一文書く。

[資料2 初めて書いた出来事作文の例] (6月10日)

2じかんめにみなみがわこうえんにいきました。
ひるやすみにてつぼうをしました。

[資料2] は自分で題材を決めて初めて書いた出来事作文である。この時期は、まだ拗音や促音の学習が終わっていない時期であるし、助詞の使い方も不適切なものが多く、ひらがな表記の間違いも多々ある。しかし、この出来事作文を保護者に読んでもらうという相手意識をもって書いていた。また「楽しそうだね。」「よかったね。」という保護者のコメントをもらう児童もいて、書くことに喜びを得ていた。一文書くだけでも時間がかかっていたが、自分で考えて文章を書いたということに満足したり、達成感を味わったりしていた。

一文の出来事作文に慣れてくると、「もっと書いてもいい?」と聞いてくる児童がでてきた。時間内ならばかけるだけ書いてもよいことにして書かせた。出来事作文は、三文程度のものを毎日書くことを目指していたため、2週間位経った頃には、「できるだけ○(読点)三つ分書くようにしよう」と働きかけた。1か月経った頃には、毎日文を書くことによって、その日の出来事を書くということに慣れてきた。一文だけ書いて終わりの児童はほとんどなく、8割の児童が三文程度の出来事作文を書けるようになった。

しかし、次のような課題が見えてきた。

[資料3 A子の例]

1じかんめはこくごでした。おむすびころりんをよみました。2じかんめはさんすうで、ひきざんをしました。
3じかんめはたいいくをしました。4じかんめはとしょじつにいきました。ひるやすみは、にしたたいいくかんであそびました。(7月5日)

A子は、書くことが好きで視写もすらすらとできる児童である。長く書くことが良いことだと思い、[資料3]のよりに時系列に従ってしたことを書き並べている。

[資料4 B子の例]

たなばたかざりをつくりました。ひるやすみたかおにをしました。たのしかったです。(7月6日)

[資料4]のように「したこと」+「たのしかったです」のパターンで毎日書いてくるB子のような作文も多く見られるようになった。

経験したことの羅列ではなく、一つの活動について詳しく書くことができると、読み手に分かりやすい文となる。事実ばかりでなく、見たことや考えたことを伝える文を書く力を付けたいと考えた。また思いはあるが書き方が分からずに困っている児童にも書き方を示して三文を書くことができる力を付けたいと考えた。

(2) 合言葉「『み』『かん』」を使った出来事作文指導

① 場面の様子を思い起こさせ、見たことを書く「み」

ほとんどの児童は、「お母さんに読んでもらう」という目的意識・相手意識を抱いて書いている。そこで、[資料5]の文例を提示し、読み手に何が伝わるか考えさせた。

[資料5 提示例文]

ア こうえんにいきました。ねじりばながありました。

イ こうえんにねじりばながたくさんありました。ぴんくのはなでした。

二つの文を比べて、アの文よりも、イの文の方が量や色が書かれているために、読み手に様子を伝えやすく、分かりやすいことに気付いた [資料6]。そして、公園の花を見て他に分かることは何があるかを考えた。数、色、形、大きさなどがあることに気付いた [資料7]。

この後、気付いた観点を生かし、学校近くの公園で遊んだことを題材にして出来事作文を書かせた。バッタやカエルを捕まえたり、クローバーで遊んだことを学級全体で思い出しながら、文にした。その作文の中に書かれた観点の割合は、[資料8]のようになった。その時に書かれた作文に色や大きさを取り入れた児童の数の割合である。複数の観点を取り入れて書いている児童がいた。題材的に色や形を書きやすかったこともあり、高い割合になっている。

[資料8 観点を取り入れて書いた児童の割合(児童数27人)]

数に着目して書いた児童	17人	63%
色に着目して書いた児童	23人	85%
大きさに着目して書いた児童	24人	88%
形に着目して書いた児童	13人	48%

[資料9] はA子による作文である。A子は、色「みどりいろとちやいろがまざったいろ」、大きさ「おおきいばった」を記述することができただけでなく、その時バッタがどのようになっていたのか自分の目で見たことを思い出して書くことができた。しかも、四文書いている。文の数は指定していないが、様子を思い出して書くことで、字数が増えた。

この学習で、児童は、見たことを思い出して書くと分かりやすいよい文章になることに気付いたので、書くときには「見たこと」の「み」を強調しながら書くようにすることを約束した。

② 活動場面で感じたことを言葉にして書く「かん」

これまでの出来事作文で、「ひるやすみに○○ちゃんとぶらんこをしました。たのしかったです。」というような「したこと+たのしかったです」のパターンで書く児童が多かった。そこで「楽しい」ときに他にどんな気持ちになるかについても書き表す力をつけたいと考えた。「楽しい」という言葉のほかにも同じような言葉はないかと児童に話し合わせたところ、[資料10]のような言葉が出された。

[資料10 児童が考えた楽しいときの気持ちを表す言葉]

たのしい うれしい きもちいい おもしろい
またやりたい もっとがんばる

[資料6 児童が気付いたこと]

アは、公園に行ったことと花があったこと。

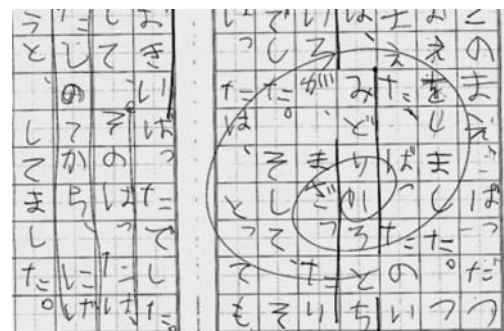
アは、ねじりばなという花があったこと。

イは、公園にピンクのねじり花があったこと。

イは、ピンクのねじり花がたくさんあったこと。

[資料7 児童が気付いた観点(目に見えること・見てわかること)]

- ・数 (いくつ・たくさん・ちょっとなど)
- ・色 (ピンク 緑 白など)
- ・形 (ハート 丸いなど)
- ・大きさ (大きい 小さいなど)



[資料9 観点を生かして書いたA子の作文]

[資料11 児童が考えた気持ちを表す言葉]

かなしい つかれた くやしい つまらない
やりたくない ざんねん このつぎはがんばる

さらに、学校生活の中には、「楽しい」ときばかりではなく、うまくいかないときもある。そのときの気持ちを表す言葉にどのようなものがあるかも考えさせた [資料11]。この話し合いから気持ちを表す言葉には、もっとたくさん言葉がありそうだとということになった。生活の中で抱く感情については、いろいろあり、三文目はそれらの言葉を書いていくと、相手に分かりやすく伝わる文になることに気付いていった。

その後児童朝会でゲームをしたことを題材にして書いた。「おもったよりもすごかった」 [資料12-1] という言葉や「がんばりました」 [資料12-2] という言葉で気持ちを表現している。また前時の「み」も意識してその時の様子を記述している。これまでの出来事作文とは、明らかに違ってきている。

この時間には、三文目に「感じたこと、思ったこと、考えたこと」を書くために、「かん」を強調するようにした。

そして、出来事作文を書くときには、見たことと感じたこと、考えたことを必ず入れる約束をした。「見たこと」の「み」と感じたこと考えたことの「かん」をとって「みかん」を入れて書こうという合言葉にし、 [資料13] のように黒板に大きくみかんの絵を書き、出来事作文を書く際に必ず合言葉の「みかん」を思い出させるようにした。

この後、毎日の連絡帳で出来事作文を書き続けた。次第に子どもたちは、「みかん」と言うとその約束を思い出して [資料14] のように書けるようになってきた。



[資料12-1]

[資料12-2]



[資料13 黒板提示]

[資料14 7月14日の出来事作文]

うんていをしました。3かいやりました。てにまめができました。(C子)

としょしつにいきました。あと2さつで30さつになります。あしたもいきたいです。(D男)

てすとがありました。まわりをみたら、みんないっしょうけんめいに行っていました。わたしもがんばろうとおもいました。(E子)

次の作文はある児童 (F男) の出来事作文である。

[資料15 F男の出来事作文の変容]

ア (6月29日) ずこうでえのぐをつかいました。たのしかったです。・・・二文

イ (7月8日) かもさんとうばんのおてつだいをしたけど、やることがなかったです。かえるをあげたら、ぱくつとたべました。おもしろかったです。・・・二文

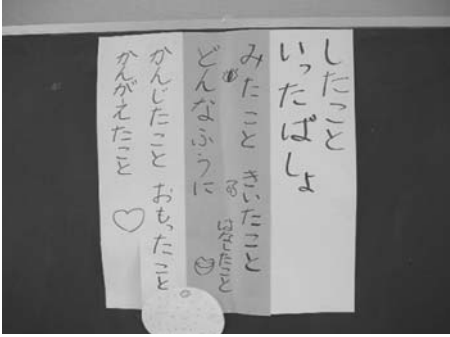
ウ (9月10日) いしとりしていたら、はさみむしがいました。つかまえてかもさんにあげました。ぱくつとたべました。はさみむしに2かいはさまれたけど、がまんして、かものところまではこんでいきました。・・・三文

このF男は、連絡帳を書くことがあまり好きではなく、三文書くように話しても、アのようにしたことを書いた後、「楽しかったです」で締めくくる二文のみの出来事作文が続いていた。しかし、みかん作文の授業で上手にできたので、友達の前で褒め、出来事作文でもこの調子で書くように励ましたら、イのようにかものようすを書けるようになった。9月になったらウのように様子をたくさん書けるようになった。

(3) 構成を意識して書く力を付けるために「三色作文」

2学期に入っすぐ、夏休みのことを分かりやすく友達に伝えるために三文を書いた。構成を意識して書く力を付けるために、一文目を白、二文目はピンク、三文目を黄色の紙に書き、視覚的に分かるようにした。[資料16]

1学期に取り組んだみかん作文のことはよく覚えていて、「みかん」の合言葉を生かして「み」をピンク「かん」は黄色と関連付けながら書かせた。黄色の部分には、前述の実践の時の気持ちを表す言葉を思い出させてから、書かせた。



白
・ ・ ・ したことや行った場所を書く。

ピンク
・ ・ ・ みかん作文の「み」を書く。見たことや聞いたこと、どんなものだったかなど。

黄色
・ ・ ・ みかん作文の「かん」を書く。感じたこと、考えたこと、思ったこと。

[資料16 児童に示した三色と文の内容]

て	でやを	い
ま	すべあ	いび
た	のらげめ	さく
や	れたり	まは
り	てらみ	し
た	おいは	たさ
り	もふい	のふ
か	しきそ	あ
す	ろにん	り
の	かせに	し
い	つもく	あ
い	たみさ	く

黄色
ピンク
白

[資料17 三色の紙に書いた作文]

[資料17] は、夏休みの出来事を書いた文である。二文目は「いっきにたべた」という様子と「おもしろかった」という気持ちが合わさった文になっている。このように一つの色紙に両方の要素が入った文を書いた児童は他にもいた。状態や様子を書いた際にそのときに思ったことを続けて書くことは自然なことである。様子や思いをどんどん書かせるために、混合文でもいいことにした。

この実践の後、連絡帳の出来事作文を書く際には、[資料16] の色分けした紙を必ず黒板に貼った。そうすることで、三文の構成が分かり、どのようにして書くかを常に意識できる。「みかん」の合言葉とともに、「白・ピンク・黄色」の三色を意識させることで児童は、三文の出来事作文が構成や内容を書きやすくなった。

[資料18 9月13日の出来事作文の例]

- 1 さっかあをしました (白)。さいしょはきいばあにとめられたけど、もういっかいけつたらきまりました (ピンク)。うれしかったです (黄色)。 (G男)
- 2 たいいくかんでだいこんぬきをしました (白)。たのしかったです (黄色)。またやりたいです (黄色)。 (H子)

児童は、連絡帳を書き終わった後担任に見せる。担任は、連絡事項が正しく書かれているかのチェックをして、出来事作文を読む。その際、読みながら一文一文に色別のシールを貼る。[資料18-1] のような文章を書いた児童には「今日は上手に白ピンク黄色で書けたね。」と声をかける。また、[資料18-2] のような文章を書いてきた児童には「今日は、白・黄色・黄色だったね。ピンクがあるといいな。『み』がなかったね。」などと声をかける。児童は自分の書いた文が様子を書いているのか経験を書いたのかが分からなくなる場合がある。シールを貼っておくと次回書く際に参考にできるし、うまくかけた場合は励みにもなる。また、様子がよくかけているところには赤ペンで線を引く [資料19]。この実践の継続により、9月下旬になると、したことだけの作文は激減した。どうしても書けない児童には、アドバイスしているが、ほとんどの児童は、三文の中に少なくとも一つはピンク (見たこと様子) や黄色 (思い) を書くことができるようになった。

出来事作文の取組の始めに比べると、書く時間がかからなくなり、文字数も増えた。7月中旬に書いた出来事作文の平均文字数は、45.8文字だったが、2学期に入り、三色作文にも慣れてきて、9月下旬の平均文字数は72.7文字になった。児童が意識しなくても、自然と文字数が増えたのである。内容的にも見たことや様子（ピンク）を書いている文の数が増えてきている。この実践を継続していくことで書く力を付けることができると考える。

4 成果と今後の課題

入門期の1年生に対して継続的な出来事作文指導を行ってきた。帯単元として、段階的に文の書き方を指導し、且つ継続的な指導は、入門期の児童に抵抗なく書かせるための一助となった。出来事作文を毎日書くことにより、書くことに慣れ、書く題材を選ぶことも容易になった。連絡帳を書くのは、学習時間が終わってからであり、1年生は、たった三文でも書き終わるのに時間がかかる。国語科の単元の一つとして、十分な時間を確保し、個別指導をしたことも書く力につながっている。

また「みかん」という合言葉や「三色作文」のような視覚的な観点を示しての指導は、様子やどのように活動したかを書かせるために有効な手立てとなった。書く観点を色別にしたことによって、したことばかりではなく、様子を表す言葉を考えながら書けるようになってきた。出来事作文を書いて教師に見せる際に「今日はピンクをちゃんと書けたよ。」とか「昨日白白黄色だったから、今日は白ピンク黄色になるようにがんばった。」など話す児童がいることから、文を書く際の指標となっていることが分かる。それに、友達の出来事作文を見たり読んだりして、「すごいピンクがいっぱいだ。」「ピンクと黄色がたくさんあるね。ハナマルだ。」という賞賛や羨望の声も聞こえる。

さらにスピーチをするときでもこの出来事作文の書き方を利用して、文の構成を考えてから話すことができるようになった。「みんなに知らせたいこと」では、三色の紙に自分が書いた文章をみんなの前で発表した。普段積極的に発表しない児童でも、原稿を見ないですらすらと話すことができた。三文程度ならすぐに話せることが分かったので、2学期は、出来事作文を「白・ピンク・黄色」にのっとして書き、帰りの会で発表することにした。これまでは、帰りの会で日直が「今日楽しかったこと」をスピーチするものであった。その際は、「今日〇〇ちゃんと昼休みに鬼ごっこをしたことが楽しかったです。」というような一文スピーチであった。それが、「したこと（白）見たこと（ピンク）思ったこと（黄色）」の順で出来事を発表できるようになった。1学期に人前で話すことがあまり好きではないと話していた児童も、出来事作文を発表するのは大丈夫と答えている。このスピーチを継続することにより、別の題材でも三文程度のスピーチができるように発展していきたい。

しかし、今回の実践は連絡帳での出来事作文の構成を中心に考えたものであり、まだ指導は途中の段階である。これから2学期後半、3学期とさらに進めて学年末には200字程度の文章が書けるようにしたいと考える。内容を膨らませるため「白・ピンク・黄色」を基にしながらバリエーションを広げていきたい。出来事作文は三文だが、実際に生活科ではシートに相当量の文章を書いている。この際にもどのように書いたらよいかを示し、内容の濃いものを書かせていきたい。そして、各学年の「書くこと」の指導事項を踏まえながら今後はさらに上学年での作文指導の在り方を研究していく。

5 参考文献

- 小学校学習指導要領解説総則編
- 小学校学習指導要領解説国語編
- 小学校国語学習指導書1（上） 光村図書 2005
- 小学校国語学習指導書1（下） 光村図書 2005
- 教育科学国語教育 明治図書 2007 No.679



[資料19 9月下旬の出来事作文の例]

- 1) 桂聖 「子どもと創る国語の授業」 東洋館出版社 2009 No.25 p49
- 2) 野口芳宏 『鍛える国語教室シリーズ12子どもは授業で鍛える』 明治図書 2005 p182-183